

芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行日/2007年5月20日

発行所 着物から服を仕立てます 梵

ご希望の方にはお送りします

高槻市芥川町2-14-3

お気軽にお問い合わせ下さい。

TEL 072-681-8870

e-mail: akutagawa_dayori@yahoo.co.jp



芥川の写真屋さん

楽しい“キミちゃん”

キミちゃんは八十を超えたフリーター、シルバーセンターに登録していて、黒豆取り、庭の草刈り、できる仕事は何でもする。冬の寒い日に土木工事の仕事にも出かけていく。潑刺として元気にあふれ、いつも笑顔を絶やさない。◆キミちゃんは母の妹なので、幼いときから知っている。村でも人気者で、いつも誰かが遊びにきている。家の中は賑やかで笑いが絶えない。どうしてこれほど楽しい人生をおくられるのだろうか。◆彼女の家は、百姓をしながら鍛冶屋と糶屋（こうじや）を営んでいた。兄弟が多くていつも人の出入りが絶えないために、金を貯める余裕がなかった。そんな家に嫁いだキミちゃんはいつもよく働き、天性の社交性も手伝ってみなに愛想よく振舞う習慣が身についた。だから、みな気軽にキミちゃんの家遊びに行くのだ。彼女の家に金がないことは誰も知っているの、訪ねるときは何かしらの食べ物などをもっていく。◆母が「お前、そんなに金がなくて働けなくなったらどうする」と心配すれば、「十日も食べんかったら死ぬから心配いらんわ」とキミちゃんはケロッとして答える。キミちゃんには、お金に対する執着がまったくないのだ。私は「人生はこれだ」と思った。



投稿をお寄せ下さい！ あなたの思いを手紙でもメールでもかまいませんからお送り下さい。

こちらで編集して掲載します。なお、お送り頂いた原稿は返却いたしませんのでご承知下さい。

芥川商店街歳時記

今月の予定

- 第四回 楽の会 亀屋寄席（笑福亭 銀瓶） 割烹旅館 亀屋
5月27日（日曜日）午前10時半開場。11時開演。会費、2500円、（お料理込み）
- フィナンシャル・プランナーによる保険見直し相談会（無料）
毎週土曜日・日曜日（要予約）保険の身近な相談所・総合保険事務所
- 芥川ハイキング 6月7日（木曜日）9時梵集合 芥川から摂津峡。3時解散予定。

深奥幽玄 手談の交わり 囲碁で豊かな人生を！

日本棋院高槻支部 芥川囲碁サロン (株)入谷商会経営

日本棋院 棋士 谷村義行八段による

大盤解説 毎月第二日曜日 午後2:30より

指導碁 毎月第二日曜日 午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

私が生まれたのは、兵庫県丹波市。

四村合併となり村から町になる。三度目の正直で、ヤッサ、モッサもめたあげく丹波市になったと聞く。いまだに私にはピンとこないけど、氷上郡と書いて発送したら、郵便やさん笑いながら配達してくれると聞く。

のどかな山里である。イノシシが出て、猿が出て、雪の中を鹿が背筋をのばして走ってゆく。丹波と聞いて、次から次へと思い出が頭をかすめてゆく。村を離れて六十年。

丹波市に恐竜が発掘されたと各方面から報道されてくる。例の好奇心から「一度見にゆきたいなあ」と田舎の友達に話したら。

「わざわざ大阪から来るほどのこともないわ、全部発掘されたら見やすくなるからその時に」

そんな時代に私の命はもうなし。

「そんな話より、また一度出会って一杯でも、ぐーっと飲んで陽気に唄って踊ろうじゃない。」

「ああ、それでいこう」と決定。



妻への詫び状を綴る

作詞家人生を支えた夫婦愛を舞台化という大きな見出しにひきつけられ、その日を持った。昭和の歌謡史に残る名曲を送り出し、陰で支えた妻との夫婦愛を描く。

“三百六十五歩のマーチ”“昔の名前で出ています”。北島三郎、都はるみ、“なみだ船”“アンコ椿は恋の花”など売れる中、絞り出すように作詞に専念する星野さんを励ましていく。

夫婦愛、涙、涙、そして胸の中へ入ってゆく。一言、一言がおだやかに流れて、私の心の中に、何か反省という文字がやきついていくのを覚え書きざるを得なかった。

自分には何も技術もない。只、上手にあそぶという心、そして個をとりもどす位のことか。傘寿を迎えたからといって、夫に対する生活、心の様式も変えられない。

ライフスタイルではなく、ハートスタイル、心の持ちよう（夫への感謝）を大きく楽しく保っていれば、身のまわりのものや、ファッションも変わる。あそび心、おしゃれ心を失わずに生きて。こんな事出来るのも誰かへの詫びであり、心からの色気なのかも知れない。

私のわがまま？

私の生まれ育った所は、純農村地帯、駅からバスで一時間。我が家は、タクシー代考えて近くまで、実家（弟）から車で送迎してもらおう。わがままですか？

田舎も今や、新興住宅地だ。ゴルフ場だとレジャー施設が増えたりで、自然が破壊されている所も多い。しかし、私の田舎はその望み全く薄く、あたりの風景依然変わらず。

家庭内の電化製品や車のたぐいは等は、都会とさほど違いがあるとは思えない程普及している。しかし、その他の事情は、かえって悪くなっている。小学校は一クラス八人、十五人程度（私達の頃は平均四十人はいたのに）。私達の学舎は、とうに壊されて空地になり、二宮金次郎さんの姿もない。思い出を語ろうにも、涙が先に流れてしまう。

人々の生活は、ほとんど米づくりに頼り、それでは食べてゆけず、女も男も、内職をし頑張っている。

むかしは炭焼きが多く。そこを通った東京ナンバーの車が、山火事と間違えて消防署に連絡した。などという笑い話もある。雨が降っても、家の中でゆっくりするということもなし、バタバタ働いていた。



年配者の多い土地での生活は古くしきたりとか、世間体とか、世間の目、口を必要以上に気にする。今でも、実家とは何か。私の出生地、もつともつと気持ちに楽しめないものか。墓参りもしなければと思うが、道端に生えている草木にも「頭を下げろ」と母がよく言った。“この印籠が目に入らぬか”と威張っている。自分のわがままを通して草木には頭を下げない。村の人達には深く、ふかくこころから、こうべをたれている。

冬の北海道・大雪山（2）

梵店主

浅い眠りから覚めたよっちゃんは、何気なく窓の外に視線を向ける。おぼろげな意識の中で仄かな明るさを感じた。窓ガラスの曇りを手でぬぐい外をのぞくと、過ぎゆく畑や森、遠くの山なみが薄暗がりの中でぼんやりと姿を見せはじめている。窓に額をこするようにして外の様子をじつと見入る。白々と夜が明けはじめ、雪におおわれた光景が広がっている。多くの生き物たちはまだ冬の深い眠りの中にあるようだ。北国の春はまだ遠い。

青森に近づくにしたがって、地の人の姿が増えてきた。街はすっかり目覚め、活動をはじめている。大きな荷を背負った行商のおばちゃんが乗り込んできた。おばちゃんは見慣れないよっちゃん風の風体をしみじみと見て、親しげに青森弁で話しかけてくる。よっちゃんにはちんぷんかんぷん。はじめて耳にする異国語のようだ。かろうじて聞き取れた言葉からおばちゃんのいいたいことを思い遣ってみる。たぶん「あんたら、どこへ行くの。あんな大きな荷物を持って、何しに」とでも訊いているのだろう。ザックに大きく書かれた大学の名前を見て、「どこの会社か

ね」と訊かれたので、「京都にある会社です」とよっちゃんは軽く流しておいた。そんな他愛もない、会話にもなっていないようなやりとりをしているうちに青森駅に着いた。

寒い。暖房でたるんだ身体には突き刺さるような寒さだ。そんな凛とした寒さが半分眠っていた感覚をすべて目覚めさせた。汽車から荷物をホームに降ろす。三人では持ちきれないほど量だ。キスリングにスキー、差し入れの酒などなど……。三人は白い息を切らせて重いキスリングを背負い、荷物を手分けして歩き出した。もっとも重い荷を担いでいるよっちゃんの呼吸は激しく乱れる。乗り換えするだけでも一苦勞、たくさんの荷物には辟易する。階段の上り下りではそうとうの体力を消耗する。

青森で函館に渡る連絡船に乗りこむ。乗客はさほど多くないので、船室でゆっくり横になれそう。二等の船室で、昨夜の寝不足を取りもどそうと雑魚寝を決め込むが、船が揺れて眠れない。津軽海峡は荒れていた。

揺れる船の中で、よっちゃんはふたたび不安におそわれていた。京都を発つ前から、灰色のもやのように胸をおおっていた不安は、その濃さをいっそう増している。津軽海峡にかかる鉛色の雲はよっちゃんの気持をますます陰

鬱にさせた。三時間あまりで船旅が終わった。はじめて足を踏む北海道に特別な感慨はわいてこない。函館から札幌行きの汽車に乗る。

札幌駅に着くと、先輩が迎えに来てくれていた。はじめて会う先輩は男前であつた。先輩はきょう結婚する。披露宴に三人は招待されたのだ。山行きの服装のままだから会場ではかなり浮いていたが、山岳部の後輩ということ歓迎された。宴の最後に、列席した先輩たちといっしょに「知床旅情」をうたい、大学歌、応援歌で閉めた。

式終了後、あわただしくよっちゃんたちは札幌を後にした。国鉄士幌線の最終列車で十勝平野を北上する。目的地は今回の山行の基点となる十勝三俣、士幌線の終点である。

夜中、ひと気の途絶えた十勝三俣駅に着いた。駅舎の待合室には雪が吹きだまつている。待合室の長いすでシュラフにもぐつて寝ることも考えたが、この寒さは尋常ではない。冬の劔岳と比べようもない寒さだ。これから明け方にかけてますます冷えるのだ。手間はかかっても、駅舎の前にテントを張ることにする。三人が身を寄せ合って寝るほうがよほどましだ。それでもテントの中はかなり寒く、寝むれなかつた。人里でもこれほど寒いのだ。山はどれほど冷えるのだろうか。よっちゃん

んははじめて経験する寒さにすくみ上がった。

翌朝、雪温計はマイナス二〇度をさしていた。テルモスを取り出すと、ガラガラといやな音がする。中を見ると割れていた。どこかにぶついたり落としたわけではない。この寒気に耐えられなかったのだろうか。こんなことは初めてだとリーダーがいう。雪温計の目盛りはマイナス二五度までしかない。山の中では二五度以下になるにちがいない。この寒さに二人の先輩も少し不安げだ。だが、すくんでいるわけにはいかない。

この一本のテルモスがなければ、山に入ることはできない。駅前の通りで店を探すと、よろず屋らしき店が一軒だけあつた。戸をたたき魔法瓶がないかたずねる。店の主人の好意で何とか調達できた。そのうえ、主人が行けるところまで店のトラックで送ってくれるという。



ルーツ (1)

お袋の生まれは、戸籍のうえでは山形の鶴岡市であるが、本人は東京だといっていた。鶴岡は祖父の出身地である。祖母は信州の山村に生まれ育った。

一昨年の秋、僕ははじめて祖母の生まれた里をたずねた。善光寺から飯縄・戸隠に通じる古い街道沿いにその村はある。中世のころから修験者たちがかよったであろうつづら折りの山路を車で登っていくと、善光寺から十五分ほどであろうか、芋井という地区にさしかかる。山あいには棚田が広がり、山肌に張り付くように民家が点在している。まわりの山は秋色を深めていた。紅い葉の群れが黄の葉を圧倒するような彩りに芋井の山を染めあげていた。日は射しているが、肌寒い。この芋井の郷には善光寺の本尊が安置されていたと、善光寺縁起は語っている。

街道をはずれて、山の奥にのびる急坂を登っていくと、それまでの傾斜地が一変して、開けた平地に出た。二十軒ほどの家が寄り添うように並び、田んぼが取り囲む。中央には小さな墓地が設けられていた。村のまわりは深い森に覆われている。この村は、軍足と書いて「グンダリ」という。南の入り口には、軍荼利（ぐんだり）明王の小

さな石像が侵入者にみらみを効かせて食前六女、十三人のきょうだいの大家族ないた。この怒れる仏は蛇を身に巻き付け、鉾をもって外敵を威嚇し、グンダリの人々を守っているのである。

明治三十八年（一九〇五）、この隠れ里のような寒村で祖母は生まれた。長女に生まれた祖母の名は式部という。式部の生家はいまも残っていた。二階建ての大きな構えである。七十半ばのおばあちゃんが畑仕事をしながら一人で住んでいた。彼女は戦後まもなくこの家に嫁いできた人で、式部の名を知っているが、面識はない。「あんた、式部さんのお孫さんかえ」と驚き、歓迎してくれた。

グンダリのほとんどの人は、昔この村に生まれ若くして病歿した式部という女性がいたことを知っている。それは、式部という珍しい名、一人の娘を残して早世したこと、式部の命日に毎年欠かさず墓に参っていた男性がいたこと……などが村人の記憶に印象深く残っているからだろう。式部についてそれ以上のくわしい事情はわからなかった。生家にいま住む女性も知らない。無理もない、八十年以上さかのぼる昔のことである。

式部の母は六人の子をもうけて、彼女が三歳のとき亡くなった。その後、嫁いできた継母は七人の子を産む。七男

かで式部は育っていく。

十代の半ば、式部は看護婦になる志をいだく。動機は何なのか、三歳のときに亡くした母の死にその芽はあるのか、いまや彼女の心の内を探るすべはない。

大正は、女性が女であることに目覚めはじめた時代である。明治の終わりに青鞥社を起こした平塚らいてふ、子をもつ以上女は経済的に自立しなければならぬと主張する歌人と謝野晶子といった人たちが、女性を取りまく鬱々とした環境や押しつけられる不条理を告発し、女性たちに覚醒を促した。

そういう時代の空気が信州の山村までとどき、式部に自立への道を促したのだろうか。看護婦という道を選ぶにしても、養蚕、稲作などの忙しい農作業のなかで十三人の子を養わなければならないという環境が簡単に許すはずはない。養蚕のあいだや作物の収穫のときは一家総出で働かなければならない。幼い妹、弟たちの面倒も見なければならなかったであろう。そんな妹弟たちが式部の袖をつかんで引き留めようとしたことは容易に想像できる。加えて、財政的な余裕があったとは思えない。両親はつよく反対したのだろうか、それとも式部の志を尊重して惜し

まない援助をし、快く送り出したのだろうか。

いろいろな難題があったであろうが、それを乗りこえ、あるいは振りきって、一步を踏みだす。式部十六歳、看護婦をこころざして、グンダリを後にした。はじめて訪れたグンダリを離れるとき、陽が山の端にかかるうとしていた。空にひとかけらの雲もない。大気は冷たく透きとおっている。夕陽は、紅く染まった山々をいつそう燃え上がらせていた。東の彼方を見やると、善光寺平をはさんではるか向こうに、噴煙を上げる浅間山まで見渡せた。



◇魚あれこれ◇

サワラ（鱈）⑤ 周防 春日丸

サワラは、「サワラの皿ねぶり」（サワラの刺身で皿をなめた）と言われるように味は格別で、トロに似た食感がある。

サワラは魚偏に春をあて「鱈」。俳句では春の季語になっている。一般的には春が旬の魚だと言われているが、場所によって旬が違うようである。春が旬なのは瀬戸内のことであって、3〜5月の産卵期前が最も美味しいとされ、関東では冬が旬となる。1〜2月の産卵期前の脂がのっているサワラを「寒鱈」と呼んでいる。

サワラはサバ科の魚で、青魚はふつう赤身であるが白身魚である。水分がやや多く、肉質は柔らかく身割れしやすい。

サワラはとにかく、スマートな体型である。頭は小さく口先がとがり、わずかに突き出た受け口で三角形の鋭い歯を持っていて、なかなかどう猛な魚なのである。背の部分は多数の青褐色の斑紋が並んでいる。地肌の感触はサバに似ている。

サワラは、腹が狭くてスマートなところから「狭い腹（狭腹 サハラ）」。「サゴシ」はサワラの若魚であるが「狭い腰（狭腰 サゴシ）」と呼ばれたのが名前の由来である。

サワラはサゴシ（四十〜五十cm 六百〜八百g）―ヤナギ（五十〜六十cm 一kg前後）―サワラ（一m以上 二kg以上）と成長につれて呼び方が変わる出世魚である。（山口から九州にかけては、三十〜四十cmをヤナギ、四十〜五十cmをサゴシと呼んでいる）

サワラ釣りには必ず氷が必要となる。何故なら、アジやハマチなら釣り上げて船の中の生け簀に入れるとまづは生きているものであるが、サワラは釣り上げると（かなり暴れたりもするが）すぐに死んでしまうのである。（ちよつと他の魚にはみられないほどの速さで泳ぐのであるから、泳ぎが速いだけに動き（泳ぎ）を止めるとすぐに死んでしまうのだとか）サワラは鮮度落ちが早く身割れしやすいので扱いの難しい魚であるために、鮮度を保つための氷は不可欠だということになるのである。片手で尻尾をつかんだりすると身がバラバラになるので腹側を上にして頭と尻尾を持つのである。

そうそうお目にかかれないサゴシが先日釣れたのである。島では魚を捌く

のは男がするものとしてしているのだが、自分でできないというのは何かと不便であるがため、目下練習中である。

これほどまでに、細長くスマートで、この胸鰭に、この背鰭なら、尻尾に近いしまった部分も、鱗が小さいのもそのためなのかしらと思いつつ、速く泳ぐ姿に納得しながら捌いた魚も初めてである。

身が柔らかいのでかなりてこずりながらもどうにか、お刺身と塩焼き、アラ煮に、クセがなくあっさり美味しくいただきました。



YOSA-PARK. ののか
(ヨサパーク)

高槻市芥川町2丁目24-5
ジョイライフマンション203号室

TEL 072-684-2220

お気軽にお問い合わせ下さい



冷えは万病のもと
健康は身体を温めることから
あなたは YOSA に座るだけ

YOSAPARK ののか

検索

<http://yosa-nonoka.com/>

雪降る朝

昭和十一年二月二十六日

その日は未明から激しく雪が降っていました。東京ではまれにみる大雪です。

この雪の中で大事件は起こりました。昭和の思い出の中でも、とくに鮮明に記憶に残っている一日です。私はいつもより

早く眼がさめました。外の雪景色に驚いて少しはしゃいでいました。「今朝は珍しい大雪よ。学校へ行くまでに雪だるまでもつくりましようよ」と姉を誘い顔を洗うのもそこそこに大急ぎで運動シャツにズボンを着こんで、外にとび出しました。

「学校におくれないようにしないとね」といい合いながら、ダルマさんの頭と胴をつくり、ふたり力をあわせて「よいしよ」と胴の上に頭をのせます。それから炭で顔をつくって完成。「お父さんにたのんで記念にダルマさんの前で写真をとってもらいましようよ」と大急ぎで家に入り、父を「早く早く」とせきたてて写真をとってもらいました。そんなほほえましい情景が懐かしく思い出されます。

私は女学校の一年生になっていました。学校は宮城の西北、麴町区四番町にありました。登校するときは、いつものように平穏で変わった様子は感じられませんでした。

学校へ行くとは何となく騒がしい。話に耳をかたむけると、陸軍の青年将校がひきいる歩兵連隊の兵士たちがクーデターを起こし、首相と閣僚たちを襲撃して山王ホテルと料亭幸楽を占拠されて、いくつかの部隊はそこに集まっているとのことでした。学校からは急遽、帰宅命令が出され自宅で次の連絡を待つようにいわれました。

軍のクーデターという恐ろしい事件がまじかに起こった衝撃に、私達は手足がすくんでしまいました。みな身体を固く縮こまらせて帰途につきました。私はいつもの通学路で帰宅を急ぎました。永田町を中心に麴町区西南部の交通を遮断したので雪のつもった道路には走る車はな

く人影もまばらでした。省線をおりて家への道路の角に重機関銃を見たときにはびっくり仰天「こらどこへいく」とよびとめられたのです。そのときはこわくて縮みあがっていました。思わず直立不動になって家の住所を「田村町二丁目十五の家に帰ります」と叫んでいました。腕に“近衛”と腕章をつけておりました。

「よし」とやさしい顔になった時はほっとしました。

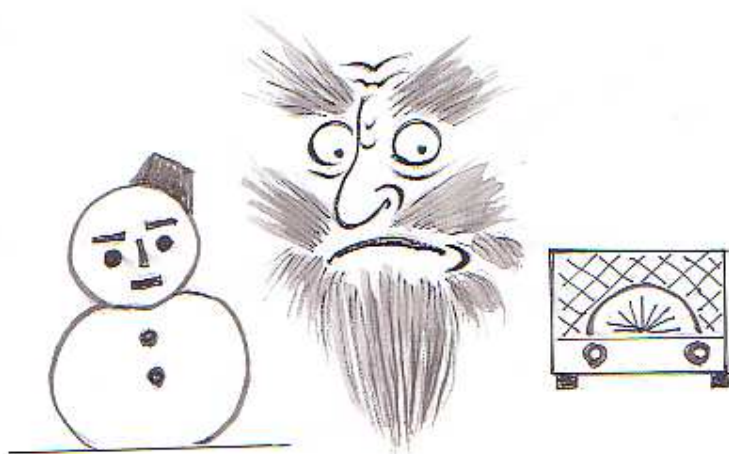
家に帰りつき「お姉さんは？」とたずねるとまだの様子、落ちつかずにラジオの放送を聞いていましたが、くわしい経緯はまだはつきりしません。

翌日、関東大震災以来の厳戒令が発動されます。新聞やラジオ放送の報道で次に反乱軍の動静が明らかになってきました。雪降る早朝、千四百人あまりの反乱軍が首相官邸や閣僚の私邸を襲い永田町一帯を占拠したのです。

首相の岡田啓介は難をのがれましたが斉藤実内大臣、渡辺錠太郎教育総監、高橋は清蔵相らが殺害されました。陸軍の皇道派といわれる青年将校たちが“昭和維新”という国家改造を目指してクーデターを決行したのです。

この暴挙に陛下は激しくお怒りになられ、もつとも信頼を寄せる老臣たちを殺傷するとは許しがたい、ただちに鎮圧せよとの厳命が下りました。そして三日目の二十八日、ラジオ放送やビラなどで帰順をうながすように勧めます。私もラジオ放送を聞いていました。赤坂見付の角にアドバルンがあげられます。だんだん判ってくるうちに、何もわからない新兵さんが多かった様で、行動をおこした十七人の将校達はしばらくして処刑されました。

二・二六事件後、軍部は国政に介入するようになり翌十二年、瀧溝橋事件が勃発して日中戦争に突入します。日本はいよいよあつい戦雲におおわれてゆくのでした。



- 独り者新入社員が気がかりに
- 春うららは今はメールでラブコール
- ハイキングかなわぬ年と夢の中

読者からのたより

「芥川だより」嬉しく読ませてもらい、やっとペンネームが分かりました。あなたがご主人さんに、畏敬の念を抱いてられるの「きらり」とした文面で分かります

ハイキングの報告とお知らせ

あいにくの雨にもかかわらず、八十五歳の元気なTさんをはじめ六人の参加者があり、楽しく歩きました。周防からたくさんのお鯛と蛸の差し入れもあり皆さんに配り喜んで頂きました。

第2回 芥川ハイキング

日時：六月七日木曜日 九時梵集合
コース：芥川から摂津峡
お気軽に参加して下さい。

編集後記

毎回発行すれば誰かが訪ねて来る。今回はどんな人が、どんな話をしにくるか楽しみです。十一号まで来ました。ここまで来れたのは、皆さんのご支援のたまものです。ありがとうございました。目指します二十四号。

ドイツの姫君 ② 梵店主 夢の中の日本

小柄で可愛いくて知性と品格を漂わせる老婦人は、彼女の生い立ちから話し始めた。ユダヤの移民である両親は北欧・フィンランドの地で教員をしながら彼女を育てた。彼女が大学に入り専攻学科を決める時に、以前に見た夢を思い出して専攻を東アジアの文化に決めたと言う。その夢は彼女が日本の城の中で姫様として君臨しているものだった、それまで日本のことは何も知らない彼女が不思議にもそんな夢を見たのであった。彼女は日本に来たこともなく日本の情報を特別持つてはいなかったと言う。

「あなたは能の流派についてどういう考えをお持ちですか？」と尋ねてきた。

「えっ、能についてですか」

能の流派については、観世流、金剛流の名前ぐらいの知識しか無い。彼女は流派の違いを知ったうえで、その違いについての私の意見を聞いてきているのである。私は一度誘われて観世流の舞の指導をうけたことがあるが、その動作がきわめて非日常的な静かさで、腰を少し下げ床を摺り足で歩き上体をぶれさせない幽玄の舞に耐えられず、

二度と行く気にならずに辞めてしまった経過がある。こんな具合だから彼女の期待に応えられない。能は歌舞伎と並んで西欧の人にとっては日本固有の音楽劇であるから興味があるらしい。

「私は、能についてはよく知らない。一度だけ能の観世流の先生に指導受けたが、とても続けられそうに無いからやめました」

舞は摺り足で静かに舞う、扇子の持ち方や足の動きのむずかしさを思い出した。次に桂離宮の建築についての話になった。近くに住んでいたことがあり、桂離宮の横をいつも通勤したものだが入った事は無い。毎日桂離宮を囲む竹林の横のひと気のない細い道を通っていて、日常的過ぎて写真では幾度も見たが、語る言葉が出ない。

大学卒業後も日本の文化に関心を持ち続け、古い家具や焼き物、着物などを買集め部屋のインテリアなどに使っているという。しかし彼女は一度も日本に来たことが無い、特別行きたいとも思わないと言う。

「私の前世はきっと日本の城の姫様だったに違いない」

と彼女は言い切るのである。庭に繁る木々を見て、静かに

「私は木や葉っぱと会話する」と言う。木々の葉っぱの音が聞こえ、何を訴えているかがわかると言う。私に対して「静かに聞いたら、貴方もわかるはずだ」と言う。

彼女は自然の語りかける声を聞き、日本庭園を造り、遠く日本から取り寄せたカモなどを見て暮らす静かな時が楽しそうであった。私は一瞬オカルトかなとも思ったが、それでも無さそうである。彼女の日本文化に対する思いは、観念として彼女の心の中に大事に創りあげられたものであるようにも思えた。

彼女の期待する日本文化についての受け答えが出来ずにいる自分に、なんとも言えない不甲斐なさを感じた。我が日本文化についての意識が低かったことは言うまでもないが、西洋の歌劇には珍しい能の仕舞いについては非日常的である故に答えることが出来なかった。桂離宮については、通勤に使うような日常の風景であっても言葉で表現できる知識はなかった。

彼女の日本を含めた東アジアについての思いは、部屋に置かれた調度品からも見とれた。大きな中国製と思わせる古い瓶は特に印象的であった。

帰り際に

「日本に来られる予定はありますか？」と尋ねると、静かな笑みを浮かべて

「行く予定はありません」と答えた。彼女の差し出す手と握手して邸を後にした。